

---

# コータくんと愉快的な、いや愉快すぎる仲間たち

澤輝 光大

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コータくと愉快な、いや愉快すぎる仲間たち

### 【Nコード】

N5022N

### 【作者名】

澤輝 光大

### 【あらすじ】

『世の中のために働きますよ部』に入部させられた、上地コータくん。

無茶苦茶な奴らばかりの部活。

大きな仕事もあれば小さな仕事もある。

その中で成長していく人たちを見ていってくださいね。

続きはWEBで！（嘘）



コータくん入部する!?

ここは、ごく普通の町、そこにごく普通の高校2年生、上地コータくん《かみじこーた》。

三吉高校の剣道部である。

だが剣道部でも、下手の一言。高校に入ってから始めたが、才能が無い。後輩にもどんどん抜かれていく。でも練習には出ている。例え後輩に馬鹿にされようが、先輩からやめた方がいい、と言われるようが、部活には出る。

そんな部活だけど、学校は楽しい。

やめればいい、と周りから言われるがコータくんは、やめることはない。

そんな根性だけのコータくんが、あるとき平凡な日々は壊された。いや、無理やり、壊されていった。

「あー今日も疲れた」

今しゃべっているのが、上地コータくん。

髪は何と片目隠れているという、髪型である。でも不潔には見えないという、ぎりぎりのラインを保っている、コータくん。

コータくんは、部活が終わりまっすぐ、寄り道をせずに帰ってきている。

優等生ではない、不良でもない。

上地家の紹介が必要だろう、妹、父、母以上。

アニメによくある、家族構成ですね。いやふつ々の家族もこんなもんでしょう。

えっ？ 私が誰ですって？ この小説の神の声とでもしておきましょうか。どんな場面からでも話すことができる、書き手側としては、とても役に立つキャラなのである。

そんな、私が語るこの上地コータくんの、いやその他にもたくさ

んの人たちが出てくる、物語です。

コータくんがリビングで寝っ転がりながらジャンプを読んでいる時、インターホンが鳴る。

「コータは、読みかけのワンピースを読みやめ、玄関へ向かう。」

「どちら様ですか？」

玄関を開けた先にいたのは、男の人と女の人二人です。

左から、背の高い女、でもコータよりかは小さいですね。まんなかに男、こいつは少し小さいですね、左の女子より小さいですね。

そして右側はとも小さな女の子、小学生ですかね。

「君が上地コータくんだね。僕たちは君を仲間にしようと、ここに来ました」

「いや、新しい詐欺ですか？ 宗教なんて入りませんよ」

コータくんが扉を思いつき閉めた。

左のでかい女が扉をつかみ閉めさせない。

「どれだけ力が強いんですかね？」

「コータさん、私たちの話を聞かないと、あなたの今好きな人を全校に言いふらしますよ？ 今井ヨーコちゃんのことを」

「!？ なんでそのことを？ あんたたちは、三吉高校の人か？」

「そうだよ、三吉高校だよ。あつ僕たちの自己紹介がまだだったね、僕は三年の石垣リョーマ。背の高い子は、二年の峰岸サキちゃん。」

そしてちっちゃいのが一年の沼倉アヤちゃんだよ」

「誰かはわかったけど、俺の家に何の用事なんだ？」

「だから言ってるんだろ、私たちの部活に入れって」

背のでかいサキちゃんが言う。

言葉が汚いですね。女の子はおしとやかにしないとですね。

「部活？ 悪いけど俺は剣道部にはいつてるんでね」

「剣道部を辞めて、僕たちの部活、『世のために働きますよ部』に入ってください」

リョーマくんはお願いのポーズで、コータくんという。

「いや、そんな部活学校には無いから」

「いや、これがあるんですよ。一部の噂好きの生徒が知っていたり、先生方が知っていたり。社会が知っていたりね」

アヤちゃんがすこし馬鹿にした感じで言う。

「あるのは、信じれないが信じてやろう、でも俺が入る理由が分からないね」

コータくんは、半信半疑で話を聞いている。

「そんなの理由は簡単ですよ、君には隠れた力がある。そして僕たちもまた同じ」

また意味ありげなセリフをリョーマくんは言う。

「そんなこと言われても、信じれるわけないだろ。僕は絶対入らないぞ」

「へー、本当にいいんですか？ コータくんはこの写真を見ても入らないって言うてられますかね？」

アヤちゃんが出した、写真を見たコータくんは、顔がどんどん青白くなる。

何を見たんですね、私も見てみたいですよ。とんでもなくやばそうですね。

「どこでこれを……？」

あらあら、コータくん今にも泣きそうな顔で言う。

「私たちの情報力を甘く見ないでくださいね。これをばらされたくなければ、今すぐこの紙に判子を押してください」

次は部活動変更用紙と書かれた紙を出す。

アヤちゃん準備がいいですね。

なんとコータくん家から判子持ってきてますよ。

あっ泣きながら、紙に判子を押しました。

男の子が泣いてどうするんですか。

「その写真の処分してください」

年下に敬語で話すコータくん。

りょーかいです、とアヤちゃん。

「でも剣道部はどうするんだよ？」

泣きやみリョーマくんに聞くコータくん。

「大丈夫、他の部員が退部届をもう出してるから」

本当に世の中のために働きますよ部のみなさんは、準備が早いです  
すね。

そんなわけで、世の中のために働きますよ部に入部した（強制）

上地コータくんはこれから一体どうなってしまっただろうか？

部員はまだこれから出てきますし、この人たちのキャラはどんどん強くなっていきますよ。

入部させられた本当の目的とは！？

そして部活動の内容とは！？

## コータくん初の仕事

ここは、平和な三吉高校。

コータくんや世の中のために働きますよ部の人達が通っている学校。

入部して一日目。

授業が終わり皆さんは、部活動へ行く時間、コータくんは、部室がどこにあるか分からないため、一人教室に残っています。

すると一人の女性がコータくんの下へやってきました。

その女性は、今井ヨーコである。

「部室教えてやるから、付いて来い」

男言葉で話すヨーコちゃん、かわいいのに残念ですね。

コータくんは、黙ってヨーコちゃんに付いていきます。

さてさてどこに行くのかと思いきや、体育館裏ですね。

何をするんですかね？ふふっ。

「ここは体育館裏だよな？ こんな所に部室なんてあるのかよ」

「黙って付いてきなさい」

ヨーコちゃんに黙ってついて行くコータくん。さっきもこんなシーンがありましたね。

そして裏に来て、少し歩くと、一つの綺麗な小屋が見えてきました。

早速中へ入って見ましょう。

中の大きさは、教室一つ分位の大きさ、二階建てになっております。

中は普通の家ですね、学校にこんな家を建てていいんですかね。中に入った、コータくとヨーコちゃん。

「いらつしゃい、コータくんヨーコちゃん。待ってたよ」  
リヨーマくんはとアヤちゃんが待つていました。

「コータくんは、この事は知らないから、ヨーコちゃんに迎えに行かせたよ」

「俺に用事でもあるのか？」

コータくんは、不思議そうにリヨーマくんを見ています。

「そうなんだよね、今日コータくんに来てもらったのは、他でもないよ。依頼が来たから、初めて仕事をしてもらおうと思ってね」

「仕事？」

仕事って何なんでしょうね。

危険なことかも知れませんか。例えば、薬物をピー、ウソですよ。

「そう、内容はねこの小包を校長に届けて欲しいんだよ」

「小包の中身って何だよ？」

「それは、僕の口からでは言えないね、それでも君が知りたいなら、校長本人から聞くといいよ」どうやら、何か訳ありの気がしますね。

コータくん危ない事件に巻き込まれなければいいんですけどね。

さあ、今からコータくんの初仕事ですよ、校長室に行くだけですけどね。ほんの五分で校長室に着いたコータくん。

「失礼します」

ノックをして礼儀正しく入って行く。

「君は誰かな？」

「上地コータです、小包持つてきました」

「あー、あれかリヨーマくんとの新しく入った子だね、リヨーマくんから聞いてるよ」

リヨーマくん校長に人脈あるってどんな人ですかね。

小包をしっかりと渡したコータくん、これで初仕事終了ですね。

「あのー校長、その中身って何ですか？」

「知りたいか？」

やっぱヤバいんですよ、コータくん踏み込んじゃダメ。

「知りたいです！」

「コータクーン！」

「この事が校内に広まれば、学校は崩壊じゃぞ。それでもいいのかわ？」

「絶対に誰にも話しません！」

「よかろう、コータくんと言ったな、中を開けて見たまえ」

「小包を渡されたコータくん、慎重に開けていきます。」

「中身はなんと!？」

「フィギュア?ってフィギュア!？」

「そうだよ、フィギュアだよ。もういい年のおっさんがフィギュアだよ、その普通に買えないから、リヨーマくんに頼んで、Amazonだよ。リヨーマくんと君しか知らないから、言っちゃだめだよ。校長がこんな趣味あるとは、思いもよりませんでしたね。」

「いや、誰にも言いませんよ。それと校長キャラ変わってますよ。」

「コータくんは、校長室を出て、部室へ帰って行きます。」

場所は変わって部室。

「リヨーマー!! お前分かってこの仕事を俺にやらせたな！」

「いきなり怒鳴って入ってこないで下さいよ」

「これが怒鳴らずに要られるか!! 最初から、フィギュアって分かかって黙ってたのかよ！」

「そうだよ。だって言ったら君は行かないだろ」リヨーマくくんは、どうやら分かかっていてコータくんにこの仕事をさせたらしいですね。

「まあ、今回の仕事とは、終わりですね。ご苦労様でした」

リヨーマくくんは、社長椅子に座りながら、言う。コータくんご機嫌斜めですね。

「そう言えば、ヨーコとアヤは、どこいったんだ?」「あー、あの2人ですか。あの2人でしたら、他の仕事をしていますよ」何の仕事かは、言わないリヨーマくくんでした。

少しリョーマくとコータくんでは話していると、ドアが開きます。誰か帰ってきたらしいですね。

「たっだいま〜。頼まれた仕事終わったぜ」

「どうやら男の方らしいですね。」

「おっ、こいつが新人か。俺は三日月ジン、ジンでいいぜ。俺も二年だからな。これからよろしくな」

ジンと名乗る男性は、身長が高くスラッとしており、イケメンと言う奴ですね。

「こんな人もこの部活何ですね。」

「おかえりー、どうでしたか？　しっかりと仕留める事は出来ましたか？」

「一体何を仕留めたんですかね。」

「楽勝だったぜ。一時間くらいで出来たぜ、そっからなかなか返してくれなくてな」

「そうでしたか、お疲れさまでした。今日はもう帰っていいですよ。あっコータくんも」

ジンくんは、部室を後に帰って行きました。

だがコータくんは、まだ帰る気配がありませんね。

「そう言えば聞きたいんだけど、この部活一体何人いるんだよ」

「えっとですね、10人くらいですかね」

リョーマくん、非常に曖昧ですね。

部長ならしつかりして欲しいところですよな。

「くらいってどういうことだよ？」

「やっぱりそこに突っ込むんですね。」

「それがだね、この部活にいるのは、10人何だけどね、人手が足りないと臨時で来てもらうからね、だから正確な人数が分からないって訳だよ」「へ〜、まだ会ったことない人いるんだな」

「そうだよ、みんな個性が強すぎるから大変だよ」

リョーマくん、他人ごとのように笑いながら、言っています。

「さっ、もう聞くことは、無いなら帰った帰った」

追いつかれるように、帰って行く、コータくん出合った。

「ふう、コータくんは、まだこの部活の怖さを知らない。がんばってね」

どっちら何か訳ありですね。

さて今回のお話はおしまい、おしまい。

コータくん初めての大事な事！！（前編）

コータが入部してから、少々日が経ち、二週間。あれから、なんの仕事もなく、ただのんびり過ごしてるだけの、部活動。何の意味があるんでしょうね、でもコータくん他の人たちと、随分仲良くなつたみたいですよ。「アヤちゃん、お茶のみたいなあ」

コータくんは、キッチンに居るアヤちゃんに言ってますね。

コータくんは、ソファアーでのんびりテレビを見てるんですけどね。

「コータさん、お茶ぐらい自分で用意してください！！」

「酷いっ！！ じゃ、今キッチンで何してるの？」「ヨーコちゃんの為にケーキを作ってますよ」

「僕の分は？」

「近くのスーパーならケーキぐらい売ってますよ」

「僕の分は無いつてことですね。いいですよ！！」あらあら、拗ねちゃいましたね。ケーキぐらいで……何処まで子供なんですか！！その前にキッチンなどが揃ってる部屋つても凄いですよね。実はこの部屋、まだまだひみつがあるんですけどね。

あつこんな話をしているうちにヨーコちゃんが部活に顔を出しましたよ。「こんにちは」

そう言つて、つかつかと入ってきて、コータくんの反対側のソファアーに座ってますよ。

「ケーキを焼いたんですけど、食べますか、ヨーコちゃん？」

「おっいいいな、食べる食べる」

「はいっ！ もうすぐ作り終えますから、待つててくださいね！！」本当にヨーコちゃんが好きなんですね、アヤちゃんは。

10分位まつたら、アヤちゃんのケーキが焼きあがりましたよ。それを切り取つて、テーブルへと持ってきましたね。

なんとお皿は3つ、何だかんだで、優しいんですね、アヤちゃん。「どうぞ召し上がれ？」「あれ、僕の分？」

「そうですね、食べないんですか？」

「いや、食べるよ！！ アヤちゃんってツンデレ？」

「そんな言葉知りませんわ！！」

美味しそうに、アヤちゃんが焼いたケーキを食べ始めてますよ。

何だか淒く平和ですね。

「そう言えば、中に入ってくる前に、リョーマに会ったんだが、何だか依頼が来てるって言うたぞ、後で部長室に私達三人来てくれと言っていたぞ」

説明しよう！！ 部長室とは、リョーマくんがいつもいる部屋である、そこでいつも依頼を受けているのである。

みんなが食べ終わり、場所変わって部長室。

三人が入ると、さつき外に居たと思われる、リョーマくんが部長室に居り、なんだかえっらい、椅子に座って待ってますよ。

「よく、来たな。 待っていたぞ！」

「それで依頼ってなんですか？」

「なんで、みんなこんなに来るの遅かったの？ 部長寂しかったよ！！」

リョーマくんかなりキャラ変わってますね。最初のクールは、どこ行っただんですか？

「……………それで、依頼何ですけどね、君達には、少し大変かもしれないけど、やってもらいたいんだけど、この学園の不良をやっつけて、貰いたい！！」

こりやまた、驚きましたね、不良ですって、不良。

この依頼絶対危ないですよ。大丈夫ですかね、みなさん。

「不良かあ、何でまた？」

「コータくんはさ、最近俺に対して敬語じゃないよね、別に良いけどね。僕もまだ、自分の事の呼び方自体定まってないから！！」

「質問に答えるよ、リョーマ」

「なんだったけ、コータちゃん？」

「お前にコータちゃんなどと呼ばれたくはない！！ 質問は、なぜ

不良だ!!」

「そかそか、それね、はいはい。最近学園の生徒で厄介な不良が居るんだよね、その子たちをこれから悪いことを出来ないことが出来ないように、腕の骨一本でいいよ」

「何怖いことサラツと言っただよ!! でもまあ何となく依頼は、分かった、でも手荒いまねなんて出来ないぞ?」

「大丈夫、大丈夫。手荒いまねは、ヨーコちゃんに任すせておけば。詳しい内容は、アヤちゃんに紙を渡しておく」

リョーマくんから、紙を渡された、アヤちゃん。ついに、始まる、新たなミッションが始まる!!

次回壮絶な戦いがここにっ!!

……私が語る出番少なくなってますよね?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5022n/>

---

コータくと愉快的、いや愉快すぎる仲間たち

2011年2月21日20時10分発行